

e-dream-s 通信

No. 135 発行：2012年9月9日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

目次

- | | | |
|---------------|-------|-------|
| 1. ファンド・レイジング | 中川 房代 | p. 2 |
| 2. 親ばか | 辻 荘一 | p. 5 |
| 3. 秋の就活事情：生命線 | 井川 好二 | p. 6 |
| 4. パーティはこれから！ | 塚本 美紀 | p. 12 |

《定時会員総会特集》

- | | | |
|--|------------|-------|
| 5. A wonderful Time with e-dream-s Members | Akhara Ung | p. 13 |
| 6. 大人になって帰って来ました | 辻 佐織 | p. 13 |
| 7. 総会に参加して
サポーターからのメッセージ | 辰巳 ゆきえ | p. 14 |
| 8. 子供たちの学校教育と生活の発展を願う SEEC 報告 | 田中 恭子 | p. 15 |
| 9. e-dream-s 総会に参加して | 赤松 由利 | p. 16 |
| 10. 意識を変えて | 岡田 かおる | p. 17 |
| 11. 「異文化セミナー」開催される | 室山 佳子 | p. 18 |



第13回定時会員総会後のパーティー

ファンド・レイジング

中 川 房 代

8月25日に、第13回定時会員総会を開催した。今年度の事業方針は、

2012年度は、「カンボジア英語教育支援プロジェクト(SEEC)」に関する広報活動と資金調達活動を拡充し、プログラムの安定した拡大と、日本からカンボジアへという一方通行ではない双方向の活動に向けての質的発展も目指し、イー・ドリームズの3つの柱である「教育」「国際」「コミュニケーション」が、さらに組織や活動の実体を表すべく努力を続ける。

(第13回定時会員総会議案書「2012年度事業方針」より)

である。昨年度から始まった「カンボジア教育支援プロジェクト(SEEC)」をより広く人々に呼びかけ、より多くの人々に寄付を募るという活動に加えて、教科書の提供、音声教材機材の提供に留まらない交流プログラムの実施に向けて、新しい一歩を踏み出す1年にしたい。広島から Akhara さんにも来ていただき、総会参加者で、その方向を確認した。

e-dream-s も設立から12年が経過した。NPO 法人の中でもかなりの古株となった。これまでは、会員とその関係者での事業が多かったため、自分の身の回りの人々に SEEC の活動を語り、広めていく活動は始まったばかり。私自身も転職したばかりで職場などではまだ人間関係での遠慮もあったりする。しかし、これがチャンス、SEEC を語ることで様々な場で新たな人間関係を結んでいければと思っている。

日本国内には、45,000 以上の NPO 法人が存在する。小規模の NPO が多く、加えて資金繰りの厳しい団体が多い。会費、助成金や委託事業などによる収入が頼りで、事業や寄付によって運営資金を調達できる団体は多くないのが現状だ。

欧米では数万人、数十万人の会員を持ち、多額の寄付を得て活動している NPO も少なくないが、日本には寄付文化が定着していないと言われる。しかしながら、東日本大震災など大きな災害に際しての募金・義援金や赤十字などの募金（十分とは言えないまでも）にかなり多くの人々が協力しているのを見ると、寄付文化が定着していない、とは言えないのではないかと感じる。

日本で NPO に寄付が集まりにくい理由に、私は2つあると思う。1つは、よく言われることだが法律や制度的な問題。NPO に寄付をしても税金控除などの制度がない

等の問題。もう1つは、NPO側の課題。自分たちのその活動をどう広めていくのかというビジョンや発想が十分でない、ということ。寄付という資金調達の捉え方の問題である。一人でも多くの人に解決すべき社会の問題を知ってもらい行動に参加してもらおうことが、より早い問題解決への道であること。困っているから寄付してもらおう、ということではなく、社会の課題への解決に寄付という形で貢献しましょう、寄付をすることで一人の子どもの命が救われたり、幸せになったりすることに関わり、共に喜びを分かち合いましょう、という呼びかけが必要だと感じている。

そんなことを考えている中、先日、寄付に関するセミナーに参加した。その内容がとても興味深かったので、聞きかじりではあるが、少し紹介する。

講師は、認定NPO法人NPO高知市民会議の事務局長をしておられる畠中洋行さん。高知のNPOを束ねる中間支援NPOとしての活動や、学生や若い世代が中心となる様々なイベントを開催しておられ、その報告もとても楽しさ満点だったのだが、ここでは、【ユニークな寄付のしくみ】について書くことにする。

まず、言われていたことは、ファンドレイジング（資金集め）のコンセプト、意味である。それは、

FUN 度レイジング（楽しむ力を高めること）
↓ <共感>
FAN 度レイジング（ファンを増やすこと）

だという。つまり、まずやっている自分自身が大いに楽しむこと（FUN）、その上でそれを十分伝えることができれば、相手の共感を得ることができ、ファン（FAN）を増やすことができる。それがあってはじめて、相手に寄付等の具体的な行動を引き出すことができる、ということである。

当たり前といえば当たり前だが、こうして改めて説明され、文字にしてみると、はっきりする。自分がその活動を楽しんでいるか、意義あるものだと感じているか、だ。そして、伝え方。どういう風に言えばよりわかりやすく伝えることができるか、の整理が必要だ。資金、寄付というとお金を提供してもらうことに気持ちが行きがちであるが、まず、共感してもらおう、ファンを増やす、ということに意識を持つべきだろう。そうすれば、寄付がその時だけの行動に終わらず、支援を続けてもらうことに繋がるのだと思う。

高知では、いくつかのおもしろい寄付の試みを始めている。これらは高知市内の NPO を束ねる中間支援 NPO だからできることであって、私たちが真似できないものもあるが、アイデアがとてもユニークだ。たとえば、

1. 駅弁 1 個の売り上げにつき、NPO に 50 円が寄付されるしくみ（子どもたちのイベントから発生した駅弁作りに関連して）
2. 「寄付つき商品」で、定価に寄付金を上乗せして商品を販売するしくみ（牛乳 1 L に NPO への寄付金 1 円を含めて販売する）
3. 市内の飲食店の協力を得て、「寄付つきメニュー」を設け、飲食を楽しみながら NPO に寄付をしてもらうしくみ
4. 「香典を社会に生かす」香典返しを NPO に寄付してもらうしくみ（香典返しのカタログに NPO への寄付を選択肢の 1 つにいれ、葬儀社に寄付を集めてもらう）

（上の NPO は、その地域で活動している NPO の中から 1 つを特定しているもの、いくつかから購入者にどこに寄付するかを選べるようにしているものもある。）

そうか、NPO でそんなこともできるのか。おもしろい。

企業でも、CSR（企業の社会的責任、Corporate Social Responsibility）の一環として、社会貢献の活動をするのが当たり前になってきた。たとえば、少し前に話題になった Volvic の「1L for 10L」のプログラム（水 1 L の売り上げごとにアフリカに 10 L ずつ清潔で安全な水を供給する支援をする）や、イオンの「幸せの黄色いレシートキャンペーン」（イオンデーに発行された黄色のレシートを自分の選んだボランティア団体の BOX に入れると、買い物金額の 1% が寄付される）などがそれである。

大がかりなことはできないが、今後、私たちの SEEC の活動に協力してくれる企業も探っていければ、と考えていきたい。

SEEC の活動を広めるために、共に頑張りましょう。今年度の支援金の締切は、9 月末です。

既に教科書は印刷中で、10 月 1 日の San Dek High School での贈呈式を待つばかり。今回の贈呈式には、辻代表理事、井川顧問、塚本国際部長・理事、岡田理事が参列します。

親ばか

辻莊一

この e-dream-s 通信には、娘の佐織が原稿を依頼されている。最初は「そんなの書けない！断る！」と言っていたが、観念して書くと返事をしたようで、なにか書いているはずである。

私には 3 人の子供がいて、すでに全員成人している。この子供たちが皆さんにお会いしたのは（と言っても長年のメンバーだけだが）佐織、そして双子の祐子も 6 歳の時である。2 歳下の彰平も一緒であった。当時 ACROSS は YMC A の六甲研修センターで合宿していて託児所もあったのである。深夜なかなか寝付かない彰平を膝に抱えてスピーチの指導をしたのも懐かしい思い出だ。

そして e-dream-s 設立の頃は小学 5 年生である。それから数年間活動の中心だった教育用写真サイト @aglance に子供たちの七五三写真を提供したのも懐かしい。

そして今年 2012 年、辰年生まれの e-dream-s は 2 度目の辰年を迎え、同じく辰年の娘たちの半分の年令になった。

今回は縁があって佐織がウェブサイトのデザインの仕事をさせてもらい、パーティにまで招待してもらい、取り敢えずサイトも出来上がり挨拶もできてホッとしている親ばかではあるが、e-dream-s が 12 歳となり、SEEC という進むべき道がはっきり見えてやはり親ばかに嬉しく思っている。



ただ私の子供たちの大人としての人生がまだ始まったばかりであるように、e-dream-s の前にある道は長い。SEEC を強力に推し進めるのは当然だが、まだまだ他にもできることがあるはずである。幸い e-dream-s にはカンボジアやアメリカに信頼出来る友人たちがいる。e-dream-s は世界を視野にいれて、まだまだ前に進むのである。

秋の就活事情：生命線

井川 好二



秋の色¹

夕方になって降りだした豪雨の、舗道に叩きつけるような勢いが、いくぶん和らぐのを待ってから、傘を広げて歩き出す。駅前から二筋目の路地へ入り、雨脚に追いかけられるように、ほんのり明かりの点いた小料理屋の前。白いのれんをくぐる。

「あら、センセ、おひさしぶり」

「ほんまに。最近忙して...」

「大学のセンセで、今頃ちょっとゆっくりしたはるのと違いますのん？」

「そうもいかんねん」

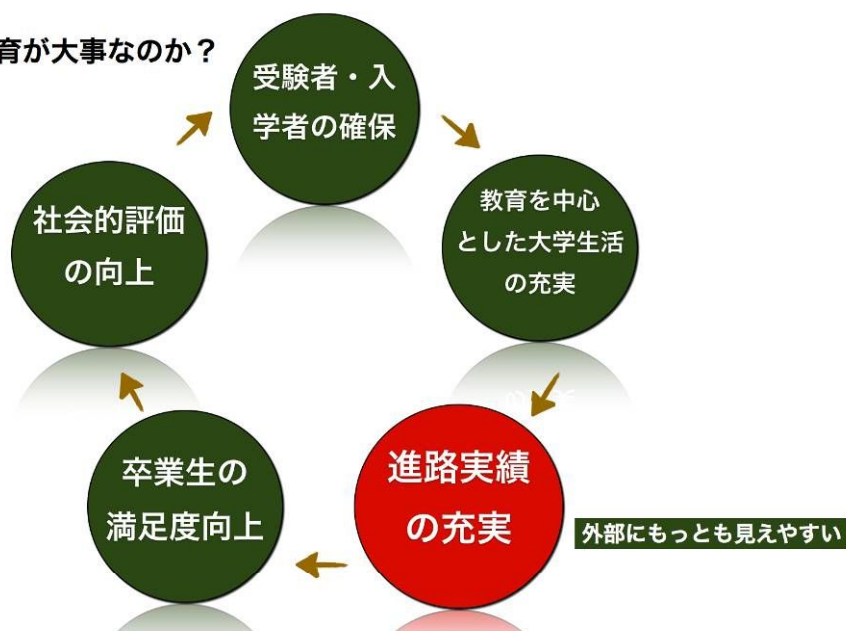
¹ 三輪晃勢：志の島忠(1998)「日本料理四季盛付」東京：グラフ

馴染みの女将が注いでくれるビールで一息。

春に人事異動があつて、キャリアセンターの担当になり、これまで馴染みのなかつた部署で、勝手の違うゲームが始まつた。

「入口」と「出口」と云われ、どこの大学でも入試と就職を担当する部門は忙しいと云われる。入試部門が、受験者や入学者を確保しなければ、大学は生き残れない。キャリア部門が進路実績を充実させないと、卒業生の満足は得られず、社会的評価は下がり、受験者や入学者の確保が難しくなる。

なぜ、キャリア教育が大事なのか？



志望校検討時の重要項目のアンケートで、進学者の約半数が、「就職に有利であること」を選ぶ。少子化で大学全入時代の今日、「超就職氷河期」と云われる時代にあつて、就職実績をあげることは、大学の生命線なのである。

「今日は、会社訪問いってきてん」

「センセがどすか？」

「そや、うちの学生よろしくお願いします云うて」

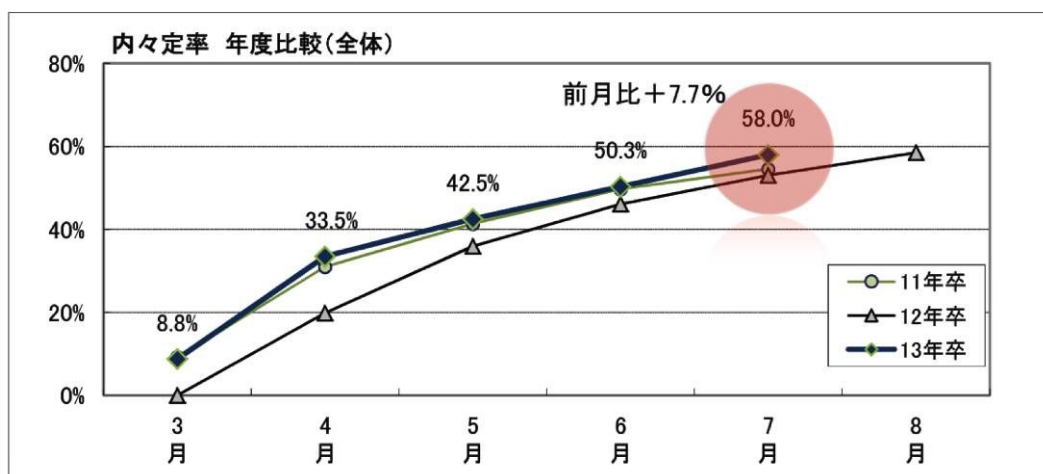
「ご苦労様どす」

「けど、アポ²なしやったら門前払いとか、冷たい会社も多い」
「そらまあ、人事の方も忙しいよって...」

来春卒業予定で、夏が終わってもまだ内定がもらえていない学生がたくさんいる。マスコミで報道される内定率は7月末現在50-60%であるが、私の勤める関西の私立大学では、マスコミ報道のほぼ半分。

もちろん、教育系、保育系、福祉系などの就職状況はこれから発表だったり、秋が本番だったりする。また、マスコミ発表は有名大学の学生で、一流会社で内定が決まったものを中心とするやや偏ったデータであることも事実だが、そうした数字が一人歩きする中で、未内定者はますます追い詰められる。

2013年卒マイナビ大学生就職内定率調査



「内定もろてへん学生さんて...」

「多いで」

「けど、去年から就活してはるんでしょ。なんで...」

「まあ一言で云うたら、準備不足で出遅れた学生がそのままズルズルと」

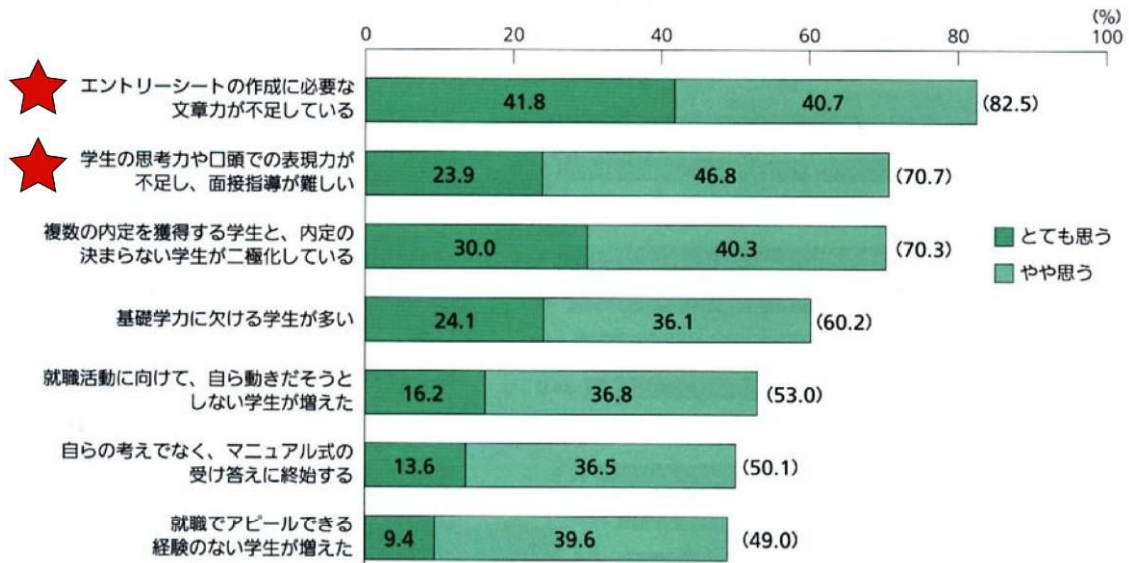
「お気の毒ですな」

「友達にも決まってないのん多いから、まだ大丈夫やろと勝手に思てる」

「親御さんもお気の毒」

²アポ 面会・会合などの約束。「一を取る」◇「アポイントメント(appointment)」の略。[明鏡国語辞典]

就職支援活動における学生の問題点・課題 (Benesse 2012)



就活支援における学生の問題点や課題に関して、全国の大学のキャリアセンターを対象に、ベネッセが行ったアンケートの結果が、上記のグラフである。

- (1) エントリーシート作成に必要な文章力が不足している。
- (2) 学生の思考力や口頭での表現力不足し、面接指導が難しい。等々。

就活学生の問題点や課題として上位に上がっている項目には、さもありませんと納得するが、日本全国津々浦々の大学でこの有様では、この国の将来がますます不安になる。

「もうすぐ3年生の就活が始まる」

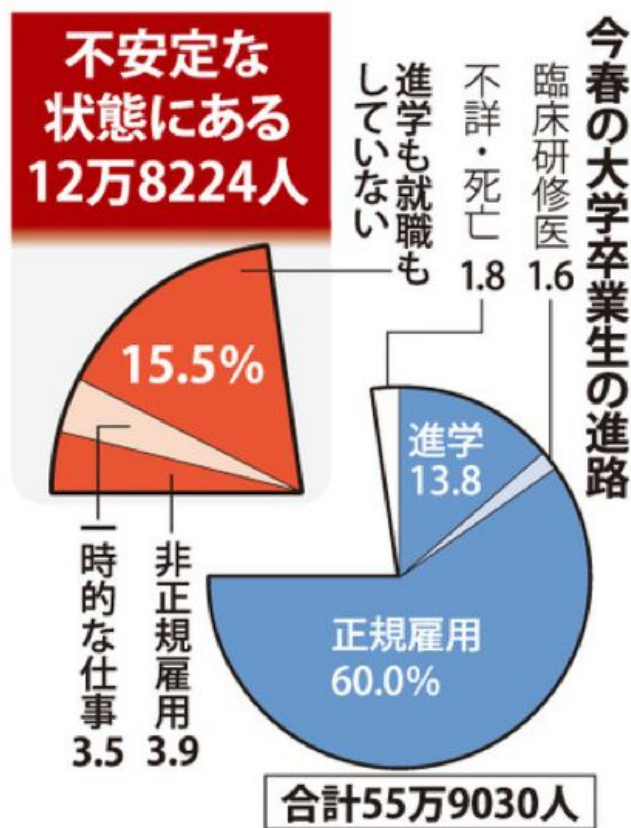
「4年生の決まってへん学生さんは、未内定のまま置き去りですか？」

「いやいや、来年の4月までにはどこかへ決まって卒業するねんけどな」

「キャリアセンターのお仕事どすな」

「けど、やっと決まっても、入ってすぐ辞めるのも多いねん」

「もともと希望してたお仕事やないですしね」



2012年春の大学卒業者の進路³

8月の終わりに文部科学省が発表した今年度の学校基本調査によると、今春、大学を卒業した約56万人の中で、アルバイトや非正規雇用に就いたものや、就職も進学もしていないニートに分類されるものの合計は、約12万8000人、22.9%にあたるという。

「えらいことになっとるな」

「若者の仕事をちゃんとすることが、日本の生命線どすな」

「ほんまや。けど、エエこと云うな」

「はい、真面目に考えんとあきませんね」

「そや、もうちょっと酒のんだら、ええ知恵が浮かぶかも...」

「はい、はい」

雨はあがったようである。少しは秋らしい風が吹いてくるのか？

³毎日新聞(2012年8月28日)



雨上がりの夕焼け⁴

この国の未来にも、少しは明るい兆しが見えて欲しいものである。(Sunday, September 9, 2012)

⁴ <http://img08.pics.livedoor.com/008/f/7/f75075bbede11d479358-L.jpg>

パーティはこれから！

塚本美紀



パーティの後はいつもそうだ。帰りのタクシーの中で、最後の新幹線に間に合うだろうかとかきもきする。今年の総会の後のパーティは、早い時間から始まったので大丈夫だと思っていたのに、みんなと話していると楽しくて、気がついたらぎりぎりの時間。

「お客さん、間に合いそうですね。」

新大阪駅が目に入ってきて、タクシーの運転手さんが言った。あと15分ある。スタバでフラペチーノを買って、ご機嫌なまま九州に帰れそうだ。

日曜日ののぞみの最終便は乗客も多くはない。座席をうんと後ろに倒し、パーティのことを思い出してみる。前年度の e-dream-s の歩みとこれからの計画を話し合った総会の後のパーティは、いつも楽しい雰囲気ではあった。昨年度カンボジアの教育支援プロジェクトが本格的に始動し、それをさらに発展させようとしている今年には更に前向きな空気が満ち溢れていた。日本語を母国語としない人が参加していることも多いので、日本語や英語が飛び交うのも愉快だ。大学の先生や高校の先生や中学校の先生、そして最近は小学校の先生もいる。もちろんそれ以外のバックグラウンドを持った人たちもいて、いろんな人と話ができるのも楽しい。

「楽しい夜だった！」

周囲に人がいないことをいいことに、つい独り言がでてしまう。ふと自分の腕を見ると、カンボジアからの留学生アカラさんにもらった木のビーズのブレスレットが目に入った。彼女が腕にしていたのが素敵で、かわいいね、と言うと、あなたにあげると私の腕につけてくれようとした。それはとてもかわいくて、自分のものにな

るのは嬉しいけれど、うんと若い友人の大切なものを奪い取るみたいで気が引けた。けれども、もうじき帰国する彼女との思い出に、そしてこれからもカンボジアでのプロジェクトを進めていくという自分の決意の証に、そのブレスレットをいただくことにした。

総会後のパーティはいつも、何かをやり遂げた後の充足感や、これから何かを始めるわくわく感がある。仲間とともに、そんな時間を持てたことを嬉しく思う。そして、パーティは終わったけど、「パーティはこれから！」なのだと思う。やりたいことがたくさんあるのだから。

そんなことを思いながら、のぞみは小倉駅に到着した。もうすぐ日が変わる。パーティはこれから！

A wonderful Time with e-dream-s Members

Akhara Ung

This is my last month in Japan after spending 2.5 year of doing my Master degree. I have had both exciting and stressful experiences. However, I have made some good friends whom I can never forget. It was such a nice time that I spent with e-dream-s members; I am really happy to have met such wonderful people. I really enjoyed living and studying in Japan despite some stressful times I went through.

I always have a wonderful time meeting with e-dream-s members every time I join the meeting. As a Cambodian, I am proud of having a lot of people know my country and of them willing to help my people. I remember thanking you all in every message of mine but still I don't feel like thanking you enough for what you have done so far to help Cambodian kids. Plus, because of e-dream-s member, I had the opportunity to travel back and forth to a different city, which was very nice for me. Furthermore, I would like to thank Mrs. Domen for always being my companion and taking care of me along the way and all e-dream-s member for everything. At the same time, I did have a chance to do some presentations about Cambodia too. Again, I had a very nice impression about the training of pronunciation. I, personally, feel that it's a great opportunity for them to practice their pronunciation. It's very important that they need to have a good pronunciation so they can teach their students very well because they are English teachers.

Finally, I would like to wish ACROSS and e-dream-s all the very best. I am sure a lot of people will remember you, the organizations and all your good deeds. You all are very kind people and you will be blessed. I am more than happy to be of any help in the future. Please keep in touch!

大人になって帰って来ました

辻佐織

サイトを制作するために、これまでの e-dream-s の活動をひと通り見直す必要がありました。以前のサイトや提供して頂いた写真などを見て改めて活動内容を知りました。

父が年に数回カンボジアを訪れていることは知っていましたが、理由や目的を詳しく聞いたことはありませんでした。また子供の頃合宿やツアーなどに同行したこともありましたが、実際大人達が何をしているのかは全く知りませんでした。サイト制作の過程で昔はほんの一部しか見えていなかった活動の全体像が見えました。

ACROSS とは 2 才から、e-dream-s とは小学校低学年から関わりを持っていますが、今こうして大人としての関わりを持てることを嬉しく思います。

総会に参加して

辰巳ゆきえ

日頃イーDreamズの活動を遠巻きに見ていると、実際に活動をされている会員の方とかなりの温度差を感じる。カンボジア教科書支援プロジェクトや震災ボランティア活動など、メールや通信で発信されているが、日々の業務に忙殺されて一会員としてはかなり遅れをとっている。総会に参加し、皆さんの活動状況を直接聞くことで、皆さんの熱い思いがどっそこちらに伝わり、温度差が緩和されたように感じることができた。今までしたことがなかったが、知り合いに教科書プロジェクトの活動を紹介して寄付を募るといふ布教活動(?)を試みることにした。Facebook も活用してできることから始めたい。大変刺激的な一日であった。

私たちの活動を影で支えてくださっているサポーターの方々に総会開催のご案内をお送りしましたところ、お二人からお祝いのメッセージを頂きましたので紹介します。

サポーターからのメッセージ

Thank you for keeping in touch with your thoughtful email regarding the annual meeting and party. It is always a pleasure for me to take part in the friendly and fruitful e-dream-s summer gatherings. To my regret, I will not be able to attend this year because of work commitments on the 25th. BEST WISHES TO E-DREAM-S!

Sincerely,
Benjamin Mitsuda

このたびは、e-dream-s 総会、パーティへのご招待ありがとうございました。

毎年、e-dream-s, ACROSSの会員のみなさまとお会いできることを楽しみにしています。生憎今年は、業務と重なりギリギリまで調整に努めましたが、出席が叶いません。誠に申し訳ありませんが、欠席させていただきます。ご参集のみなさまに何とぞよろしくお伝えください。

田尻忠邦

子供たちの学校教育と生活の発展を願う SEEC 報告

田中 恭子

今年 2012 年度のカンボジア教科書支援プロジェクト (SEEC) の内容を総会の報告で伺った時、英語教育の前に、今の私たちの生活との大きなギャップを改めて感じた。教科書支援に加えて新たに音声教材支援を行うために、車のバッテリーが支援対象になるなんて…と。議案内容を見て目を丸くしてしまった。

5 月に辻代表理事と中川副代表理事がカンボジア **Batheauy High School** に訪問した際、音声教材に必要な CD ラジカセと充電型単 3 電池に、単 3 電池を単 2 電池に変換するケースとポータブルのソーラー充電器を持参されたとあり、用意周到のように思ったが、なんと電源に車のバッテリーを使う国だったとは…。しかも、普段も家庭では、車のバッテリーにテレビや CD プレーヤー等の電化製品をケーブルでつないでいて、乾電池よりも馴染みがあるとのこと。車のバッテリーの説明でも、1 つ 80~90 ドル、1~2 週間に 1 度はリチャージが必要で、それ自体の耐用年数は約 1 年。日本の中古車が走るのを街中で見かけたが、カンボジアでは車のバッテリーはこれが一般的なのか。

総会の時は、申し訳ないが想像ができかねた。今はというと、こんな想像で恥ずかしいが、電動自転車に乗る私は、明日からの数日間娘を後ろに乗せて乗り回すために、今このレポートをまとめながらまさに 2 週間ぶりに電動自転車のバッテリーを充電中で、つまり充電されたこのバッテリーをケーブルでつないで、テレビを見たり音楽を聴いたりしているのか、多くのカンボジアの人々は…、だ。

2 度のカンボジア滞在中さほど不便を感じなかったのは、単に恵まれた良いホテル生活だったからだ。今の私たちの生活と同じ様に、テレビはコンセントにつながれ、そのテレビは勿論リモコン付きだ。室内の照明も明るく、デジカメやパソコン、携帯の充電も、無意識にコンセントにさしていた。分かってはいたものの、電源でこんなギャップがある。貧富の差が深く、子供たちの成長に最も不可欠な教育現場が、電源どころか教科書すらも一人一人に渡りきらない現状やカンボジアの子供たちの事、SEEC の活動が新しくなった **e-dream-s** のホームページを通して、本当に多くの人に伝わってほしいニュースだ。

私が中学生の頃、いや高校生の頃までは、先生が音声教材にカセットテープを使っていたのを懐かしく思い出した。先生は私たちに繰り返し聴かせて発声練習させるのに、巻き戻す時は、じっと巻き戻しカウントを見入っていた。いつの間にか、CD プレーヤーに変わり、プレーヤーを使いこなせない先生は別として、音もよくなり、授業を受けながら要らぬ気が散らなくなった。少なくとも私が受けた学校教育期間はそれほど音声教材に進化はなく、普通の公立高校なので LL 教室もなかった訳だが、教育予算の問題だけでなく、そもそもカセットテープしかなかった時代だった。しかし今の世の中は、CD にとどまらず私がついていけないほどの教材や機器が

溢れているのだから、少しでもインフラが整い、貧困層の子供たちの学校教育に潤いがもたらされたら、と願う総会だった。

アカラさんのプレゼンテーションで笑ってしまったのが、彼女が初めて日本に来て、学食で口にした日本のカレーライスの話だ。パーティでもう少し詳しく聞くと、カンボジアのカレーはココナツミルクが入ったり、見た目も全く違っていた。二度と日本のカレーライスは食べたくない！と力を込めたアカラさんの言葉に、日本では子供から大人までカレーライスは人気なので、様々なカレールーを開発する食品メーカーは嘆くだろうな…と苦笑した。

世界共通語になった英語を身につけて世界の人と交流すると、食文化でも楽しい異文化コミュニケーションができる。この異文化コミュニケーションの楽しさを味わったことが、純粋に私が英語を学びたいと思ったきっかけだった。英語を身に付けると良い職に就けるだろうが、異文化の人々とコミュニケーションできる醍醐味も、子供たちにはもっと味わってもらいたい。昨年教科書を進呈した **Batheau High School** では、生徒がとても熱心に英語を勉強しその成果を見せてくれたという報告に、胸が熱くなった。

e-dreams 総会に参加して

赤松 由利

昨年10月に初めてアクロスの体験訓練に参加して、はや1年が経とうとしています。入会してすぐ初参加したフォーラムはカンボジアへの教科書贈呈式報告の特別な会だったようですが、なぜカンボジアに教科書を送るのか、すごいことなのでしょうが、正直あまりピンとこず、超多忙な学校の先生方が、それも田辺先生は小さい息子さんまでおられるというのに、はるばるカンボジアまで行かれ、皆さんすごく活動的だなというのが第一印象でした。

アクロスとは別に **e-dream-s** という組織が存在するとわかったのは、冬合宿ぐらいです。そして先日の総会に参加して、ようやく全体像が見えた感があります。

井川先生のおっしゃるように、本当に必要な人に、必要なものが届くように支援することは難しいと思います。あまりにもかけ離れた目標ではなく、自分たちの身の丈にあった支援を一生懸命考え、形にしていく **e-dream-s** の活動、そしてそれをみなで支えあう会に出会え、また人として尊敬できる皆さんに出会えたことに感謝しています。

電気も通っていない学校で一生懸命学ぼうとする若者がいる一方で、当たり前のように教科書が配布され、4月の廃品回収に教科書がどっさりと捨てられる現実に胸が痛みます。まずは自分にできる小さな節約から！ **e-dream-s** の印刷を失敗しないように心がけます。

意識を変えて

岡田かおる

7月から、「カンボジア教育支援プロジェクト (SEEC)」の支援金の協力を周囲の方へお願いしている。昨年も同僚教員にお願いしたが、今年は少し意識を変えて呼びかけをしている。

昨年は、寄付をお願いするのは、相手に私のやっていることにつき合わせるような感じがして、どこか申し訳ないなという感情があった。だからこの人なら寄付してくれそうという親しい人にしか、声をかけられなかった。変化のきっかけは、NPOの資金集めに関するある本の中の文章だった。手元に本がなくうろ覚えだが、内容は次のようなものだった。寄付文化の根づいているアメリカでは、職場で同僚が「ねえ、寄付しない？」と気軽に誘ってくる。筆者（日本人）はそれに驚き、また新鮮だった。それは、相手に社会貢献をしないかと勧めているわけで、いいことを相手に勧めているという感覚だ、というのだ。それを読み、そうか、自分のやっていることに相手を付き合わせるではなく、自分のしている「いいこと」を一緒にやりましょうと相手を誘うのか、と何かがパタンとひっくり返ったような気持ちになった。

それで今年は、もう少し多くの人、学校の同僚、卒業生、元同僚、趣味で入っているソフトテニスクラブの仲間などに「私はこんな活動をしているんです。もしよかったら協力をお願いしますか」というパターンで話をしている。もちろん声をかけた方が皆協力してくれるわけではない。また、あまり親しくない人に個人的に話をするのは難しいし、こんな場で話してもいいかなと迷うこともある。けれど、気軽に声をかけていいんだ、と意識を変えただけで、以前より積極的になることができたと思う。

こちらがハッとさせられる反応がときにある。ある方には、「ぜひ参加させてください。」と答えていただいた。協力してくれた卒業生に「ありがとう」と言ったところ、「僕ら社会貢献とか普段していないからこちらこそありがたいです」と返された。また、昨年も協力していただいた方に「後でお便りがもらえるんですね。」と言われた。その方には、昨年10月の贈呈式の様子が記されている e-dream-s 通信を、報告として渡していた。それを覚えていてまた楽しみにしていることが感じられた。

9月いっぱい、もう少し呼びかけてみようと思う。自分が動くことで、新たに見えてくることがありそうだから。

「異文化セミナー」開催される

室山 佳子

去る7月12日、勤務校の岩槻高校において、カンボジア留学生のチア・ポーレンさんを講師にして、「異文化セミナー」が行われた。「異文化セミナー」とは、岩槻高校の国際文化科の行事で、生徒たちがさまざまな国や文化の理解を図れるように、企画するものである。

今回の講師は、チア・ポーレンさんで、e-dream-sに関わりのあるソパさんに紹介していただいた。ポーレンさんは、カンボジア国立大学で金融論を学んだ後、3年間仕事をし、2009年来日。日本語学校に1年間通った後、一橋大学経済研究科研究生を経て、現在、一橋大学大学院経済研究科修士課程に在籍中である。



セミナーは、「カンボジアの文化・教育」という演題で行われた。まず、カンボジアの基礎知識をクイズ形式で導入する。これは、120人の高校生を相手に小1時間飽きさせずに話をするのは、難しい面があるだろうと思い、こちらから提案したものだ。その後、ポーレンさんが地域のグループ対象に使ったことのあるパワーポイントを用いて写真を見せながら、カンボジアの生活・文化・教育制度や日本との関係等についての話をしていた。

右の写真でわかるように、結婚式用の民族衣装を着て、終始にこやかな表情で生徒たちをひきつけた。生徒たちも物怖じせずたくさん質問をする。生徒達は、答えを聞くと、「オーケン（ありがとう）」と習いたてのクメール語でお礼を言うことを忘れない。「日本に来て驚いたことはありますか?」「もう慣れてしまったけれども、電車内でのアナウンスが多いことです。」「彼はいますか。カンボジア人ですか。日本人ですか。」というプライベートなことにも、はにかみながらも応じてくれた。



こちらが驚いた質問は、「カンボジアには、泊まる場所はありませんか。」というものだ。生徒の感想文の中にもあるが、「カンボジアは地雷や内戦があつて怖いところ、危険なところ、貧しい国」というマイナスイメージが定着していたようだ。もう内戦は終わっていて、地雷の撤去も進んでいること、世界遺産など見る価値のあるところがたくさんあること、プノンペンの市場には食材がたくさん売られていて、食べ物もおいしいこと、日本からの支援があり皇太子の訪問など交流も盛んなことなど初めて知ることがたくさんあり、「怖い、危険な国」から「行ってみたい国」へ

とイメージが変わったようだ。

日本の学校は、ともすると、カンボジアの暗い過去ばかり強調して生徒に伝えて来てしまったのかもしれない。確かに首都プノンペンを一步出ると、舗装もしていない道が続き、教室に電気も来ていない学校があり、教科書も買えない生徒たちがいる。それも現状だが、カンボジアは日々変化し、若者たちは一所懸命勉強して、豊かな生活を取り戻そうとしていることも伝えなければいけない、と私自身学んだ「異文化セミナー」であった。

写真右:ポーレンさんの話を聞く国際文化科の生徒たち



定時会員総会では1年の区切りを終えて、さらに前へ進んでいこう、SEEC を成功させよう、という活力が溢れていた。多くの会員の力の結集を感じたひと時だった。(岡田)